

座標: 北緯41度0分31秒 東経28度58分48秒

ウィキペディア

アヤソフィア

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

アヤソフィア（トルコ語: Ayasofya、古典ギリシア語: Ἁγία Σοφία (Hagia Sophiā)、現代ギリシア語: Ἁγία Σοφία (Aagia Sophia)) は、トルコのイスタンブールにある**博物館**^[1]。東ローマ帝国（ビザンツ帝国・ビザンティン帝国）時代に正統派キリスト教の**大聖堂**としての建設を起源とし、帝国第一の格式を誇る教会、コンスタンティノープル総主教座の所在地であった^[2]が、1204年から1261年まではラテン帝国支配下においてローマ・カトリックの**教徒大聖堂**とされていた。その後は1453年5月29日から1931年までの長期間にわたり**モスク**として改築を繰り返し使用されて現在の特徴的な姿となり^[3]、後に世俗化された。1935年2月1日から博物館（トルコ語: Ayasofya Müzesi）として使われている^[4]。

東ローマ帝国の代表的な遺構であり、しばしばビザンティン建築の最高傑作と評価される。その**歴史**と威容から、**オスマン帝国**の時代においても第一級の格式を誇る**モスク**として利用された。日本語では慣用的に「ハギア・ソフィア」と呼称されるが、厳密にはトルコ語読みは「アヤソフヤ」、古典ギリシア語読みは「ハギア・ソピアー」、現代ギリシア語読みでは「アギア・ソフィア」に近い。正教会では「**アギア・ソフィア大聖堂**」と呼ばれ、「**ハギア・ソフィア大聖堂**」と表記されることも多い。

目次

概説

歴史

創建

現在に至る構築

カトリックからの奪還

オスマン帝国時代

宗教施設から博物館への転換

構造

博物館内部の装飾

モザイク画

登録基準

ギャラリー

脚注

参考文献

関連項目

外部リンク

概説

アヤソフィア、あるいはハギア・ソフィアと命名された**教会堂建築**は、**ギリシア**やトルコなど、かつての**東ローマ帝国**（ビザンティン帝国・ビザンツ帝国）領の各地に数多く残されているが、単にアヤソフィアと言った場合、イスタンブールのアヤソフィアを指すことが一般的である。元来の名称であるハギア・ソフィアはギリシア語で「**聖なる叡智**」を意味し、その中世の発音「アヤ・ソフィア」がトルコ語名「アヤソフィア」の由来である。

教会は三位一体の第二にあたる**ロゴス**に捧げられた^[5]もので、ロゴスが示すところのキリストの**受肉日**である12月25日に献納された^[6]。

時に使われるSancta Sophia（聖ソフィア）の名は**殉教者ソフィア**にちなんだと受け取られるが、「sophia」はラテン語で叡智を意味し、ギリシア語表示のΝαός της Αγίας του Θεού Σοφίαςは「神の聖なる叡智の神殿」を表している^{[6][7]}。

イエス・キリストを象徴する**東に至聖所**、**西に正面玄関**を持つ伝統的な平面構成だが、**身廊**中央部に巨大なドームがあり、これがアヤソフィアの最大の特徴となっている。創建当時は単純な四角形平面であったが、その後、東ローマ帝国、オスマン帝国の時代を通じて、周囲に様々な施設が建て増しされた。内壁は基本的にはオスマン帝国時代に塗られた漆喰仕上げ、大理石仕上げとなっているが、一部が剥がされ、東ローマ帝国時代の**モザイク壁画**をみることができるようになっている。

巨大なことで知られる特徴的なドームを持ち、ビザンティン建築の典型とみなされ^[8]、「建築の歴史を変えた」とも評される^[9]。1520年に**セピリア大聖堂**が完成するまでは**世界最大の大聖堂**の地位を1000年近く保っていた。現在の建物は532年から537年にかけて東ローマ皇帝ユスティニアヌス1世の命によって建設されたもので^[10]、この地に建てられた3代目の建物にあたり、以前の2代はいずれも**暴動**によって破壊された。デザインはギリシアの物理学者ミレトスのイシドロスと、数学者トラレスのアンテミオスによってなされた^[11]。

1985年、「**イスタンブール歴史地域**」の一部としてユネスコの**世界遺産**に登録された。

歴史

 アヤソフィア Ἁγία Σοφία Ayasofya Sancta Sophia
 アヤソフィア
 イスタンブール
所在地 イスタンブール（かつてのコンスタンティノポリス）、トルコ
設計者 ミレトスのイシドロス トラレスのアンテミオス
種類 ▪ 正教会 Cathedral（537年 - 1204年） ▪ カトリック教会 Cathedral（1204年 - 1261年） ▪ 正教会 Cathedral（1261年 - 1453年） ▪ イスラム教 モスク（1453年 - 1931年） ▪ 博物館（1935年- 年）
資材 石、brick
全長 82 m（269 ft）
幅 73 m（240 ft）
高さ 55 m（180 ft）
建設開始 532年
完成 537年

世界遺産



英名	Historic Areas of Istanbul
仏名	Zones historiques d'Istanbul
登録区分	文化遺産
登録基準	(1),(2),(3),(4)
登録年	1985年
公式サイト	

ユスティニアヌスによって再建されたアヤソフィア大聖堂は、[コンスタンティノープル総主教庁](#)の所在地として[正教会](#)第一の格式を誇り、また東ローマ帝国の諸皇帝の**霊廟**として用いられた。コンスタンティノープルを訪れた人びとの巡礼記録から、聖堂内には現在では失われた施設・聖遺物があったことが知られる。14世紀にコンスタンティノープルを訪れたロシア人スモレンスクのイグナティオスの記録では、聖堂内部には多くの**礼拝堂**が設けられ、「*ノアの箱船*の扉」やイエスが磔にされた「**聖十字架**」、「**アブラハムのテーブル**」など、多くの**聖遺物**が安置されていた。また、この時代は隣に**総主教**の官殿が併設されており、内**ナルテクス**南端の、現在では出入り口となっている部分は、総主教宮殿への通路となっていた。

カトリックからの奪還

アヤソフィアは13世紀にラテン帝国の支配にあった1204 - 1261年にはカトリックの影響下に置かれた^[1]。1261年の奪還後^[27]、床の装飾の一部に ボードゥアン1世の墓碑文は、1261年にコンスタンティノープルが奪還された際にビザンティンの人々が吐き捨てて唾に晒された^[28]。奪回した時、教会は荒れ果てた状態にあった。1317年、アンドロニコス2世パレオロゴスは亡き妃**ヴィオランテ・ディ・モンフェラート**の遺産を使い、教会の東と北に4つの**バットレス**を新設した^[27]。

オスマン帝国時代



アヤソフィアのミフラープ

1453年、メフメト2世はコンスタンティノープルをイスラムの勢力下に収めるため包囲した^[29]。後に彼自身が後悔する事になるが、メフメト2世は都市の占領が成し遂げられれば、3日間の**略奪**行為を許すと軍に告げた^{[30][31]}。アヤソフィアも例外ではなく、むしろ都市の宝物が収めてあると考えられ標的にされた^[32]。防衛網が崩れると、略奪者らはアヤソフィアへ押し寄せ、ドアを叩き壊した^[33]。教会に避難していた、防衛の役に立たない多くの者たちは^{[34][35]}、教会に集まった人々もろとも侵略者の戦利品になり、**虐殺**もしくは**奴隷**として鎖に繋がれ、建物も荒らされ略奪された^{[32][33]}。聖職者らは侵略者が妨害するまで祈り続けていた^[33]。メフメト2世が僕らと到着すると、彼はアヤソフィアをモスクに作りかえると宣言した。すると**ウラマー**のひとりが聖壇に上がり、**シャハーダ**の暗唱が行われた^{[27][36]}。

のひとつとされた。

しかしその状態は、例えば**コルドバ**の**ペドロ・タファ**^[39]や**フィレンツェ**の**クリストフォロ・ボンデルモンティ**^[40]など西側のからの旅行者が記したように、教会は荒廃するに任せ、厩が外されたまま放置された箇所もあった。建物の手入れと改築を命じたメフメト2世は、同年6月1日には最初の金曜礼拝に赴いた^[38]。アヤソフィアはコンスタンティノープルにおけるオスマン帝国初のモスクとなった^[41]。

1481年までに、南西の階段塔の上にミナレットが建設された^[27]。次代のスルターンである**バヤズィト2世**はミナレットを北東角に設置した^[27]。このうち一つは1509年の**イスタンブール地震**で倒壊したが^[27]、16世紀半ば前後に建物の東西部分に新設されたミナレットと対角線上に当る部分に移設された^[27]。16世紀には**スレイマン1世**が征服した**ハンガリー**から2基の巨大な燭台を持ち帰り、ミフラープの両脇に据えた。セリム2世時代には建物に劣化が見え始め、建築家であり世界初の地震対策技術者とも評された**ミマール・スィナン**が主導した外部からの補強構造追加など幅広い補修工事が行われた^[42]。スィナンは歴史的なビザンティン建築の西端に2基の大きなミナレットを据え、さらにスルターンの特別席が作られた。南東の建物では、1576 - 1577年にセリム2世の**テュルベ**（墓廟）を据えるため、1年前にS字型の角にあった総主教の**テュルベ**が取り壊された^[27]。ドームの頂上には、金の三日月が取り付けられ^[27]、これが反射する光が届く35アルシン^[43]（約24 m）幅の建物周辺からは当時建っていたすべての家屋が取り除かれた^[27]。ここには後に、オスマン帝国の皇女43人のテュルベも追加された^[27]。

1594年には宮廷建築家（ミマール）の**ダヴッド・アー**が、皇帝**ムラト3世**と**ヴァリデ**である**サフィエ**・スルタンの命を受け、皇帝のテュルベを建設した^[27]。その横の八角形の陵には彼らの息子メフメト3世と彼のヴァリデが葬られたが、これは1608年に王室建築家の**ダルクチ・アハメッド・アー**の手による^[44]。次代の皇帝**ムスタファ1世**のテュルベは、**洗礼堂**を作り変えて設けられた^[44]。ムラト3世はまた、**ベルガモン**から**ヘレニズム**調の**アラバスター**製つぼを2つ移し、本堂の両端に据えた^[27]。

1717年、**アフメト3世**は内装のひどく損傷した漆喰の補修を命じ、多くの**モザイク画**がモスクの作業者らによる破壊から守られ保存される事に間接的ながら貢献した^[44]。事実、モザイク画の石は**タリスマン**と信じられ、訪問者へ売られる事が横行していた^[44]。

1847年、**アブデュルメジト1世**の命により、**イタリア人建築家ガスパレー・フォッサーティ**によって構造的な補強が行われ、ドームの水平推力に対抗するためドーム基部に鉄製の環状補強材が埋め込まれたが、これはあまり有効に機能していないことが判明している^[1]。主柱に**ムハンマド**と**正統カリフ**の名を記した円形の額が取り付けられたのもこの補修の時である。フォッサーティは工事の内容を繼めて書籍出版を準備したが、同じ頃**ドイツ**の建築家**ザルトゥエンブルグ**も別に調査を許され、フォッサーティは大判の彩色図集を、ザルトゥエンブルグも大判の研究書をそれぞれ発行した^[1]。

宗教施設から博物館への転換

オスマン帝国の滅亡から12年後の1934年、**トルコ共和国**の建国者にして初代大統領**ムスタファ・ケマル・アタテュルク**によってアヤソフィア・ジャミイは世俗化され^[1]、翌年に博物館として公開した。長年敷かれていたカーペットが取り払われて大理石の床の**オンファリオン**（戴冠のための円形の場）や、除去された白漆喰が覆っていた多くのモザイク画が姿を現した。しかし建物の構造には劣化が見られ、**ワールドモニュメント財団**（WMF）は1996年と1998年の「ワールド・モニュメント・ウォッチ」に記載された。建物の銅製の屋根にはクラックが入り、そこから染み込んだ水がフレスコ画やモザイク画を伝って流れ落ちていた。同様に湿気は下からも上がってモザイク画に影響していた。さらに地下水が上がって記念的建造物内部の湿度上昇に結びつき、石材や塗料を脅かしていた。アメリカン・エキスプレス社の財政的援助を受け、WMFは1997年から2002年にかけて修復のための費用を交付すると保証した。第一段階として、天井部分のひび割れ修繕と構造の安定化工事が、**トルコ文化観光省**参加の下で行われた。第二段階はドーム内部の保存のため、若いトルコ人博物館学芸員を雇いし訓練する機会を設け、モザイク画の保護体制を確立した。2006年までにWMFの**プロジェクト**は完遂したが、他の部分にも引き続き保存活動が求められている^[45]。

現在、建物はモスクや教会など宗教的行事の場として使うことが厳しく禁じられている^[46]。しかし2006年にトルコ政府は、博物館内の小部屋をキリスト教徒やイスラム教徒のスタッフが祈りを捧げる場所として使えるよう許可を出したと伝えられた^[47]。

構造

平面は集中式プランと**バシリカ式**プランの融合を特色としているが^[48]、それまでのローマ帝国、東ローマ帝国（ビザンツ帝国）時代において、この建築物に類例するプランは存在していなかった。正教会の規範に従い、教会は西を開口部とし、東に至聖所を備えている。聖所（内陣）と正面入口の前に啓蒙所と呼ばれる細間があり、大聖堂として使われていた当時は、信者でないものはここから先に入ることを許されなかった。現在は失われているが、啓蒙所の前には**アトリウム**があった。

基本的には長方形平面であるが、内部立面の**アーケド**や**アーチ**による曲線、ここにイシドロスとアンテミオスによって計画された30.95 m四方形の上部のドーム、さらにのち補強のために周囲に配された多くのバットレスによって、建物全体が方形であることの印象は受けない。

構造的にもっとも特徴的なのは、正方形のプランの上に、ドームが乗っていることである。それまでドーム建築は、ローマの**パンテオン**に見られるよう単純に、ドームの平面形とおなじ円形プランで構成されていたが、ビザンチンの建築家は、ドームの円形と正方形の隙間にできる三角形部分を**ペンデンティブ**という支持方法で埋めることにより解決した。さらにアヤ・ソフィアでは、中央の大ドームを受けるのに平面の正方形の四辺にあたるところにそれぞれ大アーチを架け、ドームの重さによる外側への水平推力については、南北は二階の回廊をまたぐ巨大な控え壁、東西は大アーチの形をそのまま展開した半円形のドームで受けるという多種多様な構造を用いている。これら重層的な構造と、中央の大ドームの基部に円形に並べられた小窓などにより、外観、内観ともそれまでにない光に充ちた豊かな建築空間を出現させた。西洋建築史においては、アヤソフィアによって古代は終わり、中世が始まったとも言われる^[49]。しかし、この斬新な構造は、論理性はともかく、強度的には不十分で、前述のように、地震によるドームの崩落の他、多くのバットレスの追加などを余儀なくさせ、この建物の外観を、最初の構想、および竣工当時からとは違うものにしてしまっている。

主構造は、石積造の他、ローマ帝国で発展した、積み重ねた焼きレンガを型枠として、その中にコンクリートを充填する方法をとっている。これが、総石造の建物と違い、工事期間の短かった理由である。

大ドームは上述の通り**558年**に崩落し、その後も地震による部分的な崩壊を経験しているが、基本的な構成は**537年**に建設された当時のままである^[50]。採光によって光の溢れるアヤソフィアのドームは「天から釣り下げられた円蓋」とされ、それがあまりにも印象的であるため、以後のビザンティン教会堂、および礼拝堂では、円蓋が建築平面の中心部に必ずと言ってよいほど配されるようになる。

アヤソフィアは集中方式による教会建築としては最大級のものに属する。これ以降、東ローマ帝国では、アヤソフィアに匹敵する建築物、あるいはこれをひとまわり縮小した規模のものさえも造られなかった（11世紀の皇帝ロマノス3世アルギュロスの時代にこれに匹敵する規模の聖堂建設が計画されたが、実現しなかった）。**オスマン朝**時代になってからは、**ブルー・モスク**(**スルタンアフメト・モスク**)のように明らかにアヤソフィアに影響を受けた様式のモスクが建造された。

今日、建築物の外観は漆喰で塗り込められ、四辺をオスマン時代に建設された**ミナレット**によって囲まれているが、イスタンブールの辿ってきた歴史の変遷を考えれば、この教会堂が遺っていること自体、ほとんど奇跡であると言って良い。すべては**中世キリスト教徒**のたゆまぬ修復と**イスラム教徒**のこの建築物に対する畏敬の念のたまものである。

博物館内部の装飾

アヤソフィア博物館の内装は、ほぼモスク時代のものを踏襲し、2階までの壁面は多色**大理石**と**金地モザイク**で、その上部は漆喰で飾られている。**アーケード**は大理石の**象眼細工**で覆われ、古代建築から剥ぎ取られた大理石円柱によって支えられているが、柱頭部分は新規に製作されたアカンサスの葉の模様のある**変形イオニア**式で、ユスティニアヌスの**モノグラム**が刻まれている。つまり、この部分は創建当時のものである。

プロコピオスによると、創建当時、ドームには巨大な**十字架**が画かれ、**アブス**には図像が配されていたらしい。このモザイクは、円蓋の崩落や、726年から843年の聖像破壊運動によって破壊されたが、プロコピオスやその他の同時代の人びとの記録には、ドームの十字架以外についての記録がないため、そもそも創建当時、人物などのモザイクはなかったのではないかと考えられている。聖像破壊運動の後は、さまざまなモザイク画が作成され、今日その一部を見ることができる。

1453年にアヤソフィアはイスラム教のモスクとなったが、オスマン帝国はモザイクを破壊することはせず、漆喰で塗りつぶしていた。しかし、**1847年**から**1849年**のフォッサーティの改修作業の過程で壁面の調査も行われ、モザイクに感銘を受けたアブデュルメジト1世の命により、漆喰が剥がされ、本格的な調査が行われた。当時はまだアヤソフィアはモスクとして利用されていたため、この調査記録がまとめられた後、堂内壁面は再び漆喰が塗られた。

トルコ革命後、**1931年**にアメリカの**トーマス・ウィットモア**主宰のビザンティン研究所がモザイクの調査を行い、**1935年**には、トルコ共和国政府の手でアヤソフィアは**無宗教の文化財**として公開された。その後、ビザンティン研究所は**1950年代**までモザイクの調査と漆喰の除去を行った。

20世紀後半には歴史的建造物の**保存**に力が注がれるようになった。アヤソフィアの内部は各所に痛みが見られ、内部円柱の傾きやドームの歪みなどが発見されている。これらの主な原因は**短期間**で完成させた工事によるもので、**レンガ**の間に盛られた**モルタル**がほぼレンガと同じくらい厚く、しかも充分な乾燥を待たずどんどん積み上げられたために長い間に**クリープ**現象が進んだものと考えられる。それでも大規模な崩壊が起きなかった事は、**6世紀**の設計が優れていた証左になる^[50]。**1990年**からはトルコと日本の国際共同学術調査が開始された^[51]。

モザイク画

大聖堂内部には、今日少数かつ断片的にはあるがキリスト教聖堂であったころのモザイク画が残っている。モザイク画のクローズアップを見るには、トルコ人**ファインアート写真家**の**アフメト・エルトゥウ**の写真がアヤソフィア北のギャラリーで常設展示されている^[51]。

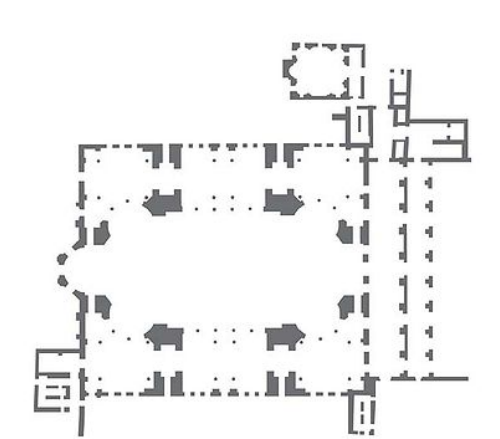
『**聖母子と大天使**』（**870年代**？）

アブスに残るモザイク画。5 m近い聖母子の座像の両脇に大天使を配するが、北側の天使像はほとんど失われている。記録に残る銘文と、876年に総主教フォティオスが行った説教から、聖像破壊運動が収束した後に描かれたと考えられるが反論もある。フォティオスの説教がこの図像を指すものであれば、これは新たに画かれたことを暗に述べているが、中期ビザンティンの「新しい（Nea）」という概念は、聖像破壊運動以前の伝統への回の意味が強く、聖母子と大天使の図像は元の装飾を忠実に再現したものか、漆喰に塗り込められていたものを再びクリーニングしたのか、あるいは新たにデザインされたものかは不明である。

大セクレトンの聖人像（870年代）

セクレトンは、2階西南にある小部屋で、かつては総主教宮殿からの通路の一部であった。聖像破壊運動により、768年あるいは769年に総主教ニケタスによって壁画が剥ぎ取られたが、その後、モザイクによって再び装飾された。ゲルマニクスやニケフォロスといった、聖像破壊運動にあつてイコンを擁護した総主教のほか、聖像破壊運動の後に総主教となった**タラシオス**、**メトディオス**の図像が断片的に残存している。

ティンバヌムの聖人像（877年頃）



アヤソフィア平面図
東側（図左）が至聖所、西側（図右）が正面入口



アヤソフィア内部北面
アーケードとティンバヌム



アブス半ドームにある聖母子のモザイク画

ドームを支えるアーチの下にある、南北の半円形壁面に残る聖人像である。北側に小イグナティオス、メトディオス、グレゴリオス・タウマトウルゴス、ヨハネス・クリュソストモス、イグナティオス・テオフォロス、キュリロス、（アレクサンドリアの）アタナシオスが画かれ、南側にニコメディアのアンシモス、大バシレイオス、ナジアンソスのグレゴリオス、ディオニュシオス・アレオパギテス、ニコラオス、アルメニアのグレゴリオスが画かれていたが、今日ではヨハネス・クリュソストモス、小イグナティオスの画像がほぼ完全なかたちで残り、メトディオスらの画像の一部が残る。

『**キリストと皇帝**』（10世紀初頭?）

ナルテクスから本堂への中央入り口上部にあるモザイク画。この中央入り口は皇帝の典礼用にのみ使われるもので、かつては別のモザイク画があった。今日見ることのできるモザイクは、キリストを取り囲むように大天使と聖母マリアの2つのメダイオンが配置され、キリストに礼拝を行う皇帝が画かれている。これがいつ、誰が作成させたのか、皇帝が誰であるのかということについては銘文がなく、テオフィロス説、レオン6世説など諸説あるが定かではない。

『**聖母子、ユスティニアヌス1世とコンスタンティヌス1世**』（10世紀後半）

西南の玄関からナルテクスへの入り口上部にあるモザイク画。中央に立つ聖母子に、向かって左側のユスティニアヌスがアヤソフィアを、右側のコンスタンティヌスがコンスタンティノープルの街をそれぞれ捧げている図が描かれている。作成時期や動機については不明である。

『**キリストと皇帝コンスタンティノス9世、皇后ゾエ**』（1042年から1055年頃）

南側2階廊に残る。モザイクの下部は失われているが、銘文から人物が特定できる。この画像は、もともとゾエが最初に結婚したロマノス3世によって寄進されたものだと考えられるが、ゾエが後にミカエル4世、コンスタンティノス9世と2度再婚しているため、夫である皇帝の顔や銘文は、恐らくその都度作り直された。今日でもその跡ははっきりとわかる。ゾエの顔とキリストの顔にも修正された跡があるが、なぜこの部分にまで修正を施さねばならなかったのかについては、諸説ある。コンスタンティノス9世は、マンガナのハギオス・ゲオルギオス聖堂建設やエルサレムの聖墳墓聖堂の修復など、莫大な国家予算を聖堂の装飾や建設に注ぎ込んだ。

『**聖母子と皇帝ヨハネス2世コムネノス、皇后エイレーネー（イリニ）**』（1122年から1134年頃）

12世紀に作成された、コンスタンティノープルに残る唯一のモザイク画。12世紀に東ローマ帝国領内で作成されたモザイクは、今日ほとんど残っていないため、貴重である。画像の配置や銘文は、側にある『キリストと皇帝コンスタンティノス9世、皇后ゾエ』に影響を受けていることがわかる。すぐ横の柱側面には、彼の長男アレクシオスの画像もある。

『**デイス**』（1260年頃）

元々は2階廊の壁面いっぱいには画かれたものであろうが、下部はほとんど失われている。それまでのモザイク画に比べてキリストの顔が立体的に描かれているのが特徴。そのほかにも、南窓からはいる光を効果的に利用するような工夫が成されているため、ビザンティン美術の最高傑作とされる。ミカエル8世パレオロゴスがラテン帝国に奪われていたコンスタンティノープルを奪回したことを記念して作られたとする説が有力であるが、文献がないため詳細は不明である。

『**エンリコ・ダンドロの墓碑**』（1205年）

ラテン帝国の時代に造られたもので、デイスと向かいあう位置の壁面近くにある。「狐」と呼ばれ第四次十字軍を巧みに操ったエンリコ・ダンドロの墓碑。これはジョフロワ・ド・ヴィルアルドゥアンの『コンスタンティノープル征服記』にも記されている。遺骨と遺品については1453年にオスマン帝国の皇帝メフメト2世によってヴェネツィア共和国に返還された。



ティンパナムのモザイク画ヨハネス・クリュソストモス



南入口の「キリストと皇帝」のモザイク画



アヤソフィア内部の「キリストと皇帝コンスタンティノス9世・ゾエ夫妻」のモザイク画



聖母子と12世紀の皇帝ヨハネス2世コムネノス夫妻のモザイク画



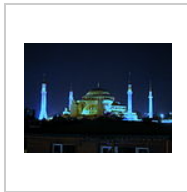
「デイス」のモザイク・イコン

登録基準

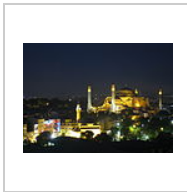
この世界遺産は世界遺産登録基準における以下の基準を満たしたと見なされ、登録がなされた（以下の基準は世界遺産センター公表の登録基準（https://whc.unesco.org/en/criteria）からの翻訳、引用である）。

- (1) 人類の創造的才能を表現する傑作。
- (2) ある期間を通じてまたはある文化圏において、建築、技術、記念碑的芸術、都市計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの。
- (3) 現存するまたは消滅した文化的伝統または文明の、唯一のまたは少なくとも稀な証拠。
- (4) 人類の歴史上重要な時代を例証する建築様式、建築物群、技術の集積または景観の優れた例。

ギャラリー



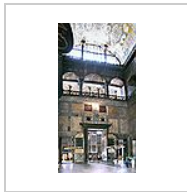
夜景



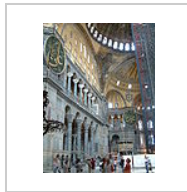
夜景



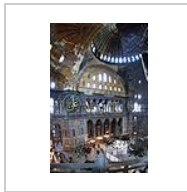
皇帝専用の入り口（外側から）



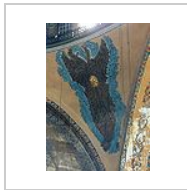
皇帝専用の入り口（内側から）



身廊内観



身廊内観



セラフィム（熾天使）



側廊内観

脚注

- ↑ *^a^b^c^d^e^f^g^hⁱ* 日高ら(1990)、p.31-66、2.ドームを仰ぎ見るとき、◎ハギア・ソフィア大聖堂<オスマン・トルコ時代のアヤソフィア>
- ↑ Müller-Wiener (1977), p. 112.
- ↑ *^a^b* "Hagia Sophia (http://archnet.org/library/sites/one-site.jsp?site_id=2966)." ArchNet.
- ↑ Magdalino, Paul, et. al. "Istanbul: Buildings, Hagia Sophia" in Grove Art Online. Oxford Art Online. <http://www.oxfordartonline.com>. accessed 28 February 2010.
- ↑ *^a^b^c* Janin (1953), p. 471.
- ↑ McKenzie, Steven L. (1998). *The Hebrew Bible Today: An Introduction to Critical Issues* (<http://books.google.com/books?id=owwhpmIVgSAC&pg=PA149&dq=%22Jesus+Christ+as+the+Holy+Wisdom+of+God%22#v=onepage&=%22Jesus%20Christ%20as%20the%20Holy%20Wisdom%20of%20God%22&f=false>). M. Patrick Graham. Louisville, KY: Westminster John Knox Press. p. 149. ISBN 0-664-25652-X.
- ↑ Binns, John (2002). *An Introduction to the Christian Orthodox Churches* (<http://books.google.com/books?id=MOA5vSI3dwC&pg=PA57&dq=%22Its+dedication+to+the+Wisdom+of+God+identified+it+with+Christ%22#v=onepage&q=%22Its%20dedication%20to%20the%20Wisdom%20of%20God%20identified%20it%20with%20Christ%22&f=false>). Cambridge: ケンブリッジ大学出版局. p. 57. ISBN 0-521-66738-0.
- ↑ Fazio, Michael; Moffett, Marian; Wodehouse, Lawrence (2009). *Buildings Across Time* (3rd ed.). McGraw-Hill Higher Education. ISBN 978-0-07-305304-2.
- ↑ Simons, Marlise (1993年8月22日). “Center of Ottoman Power” (<http://www.nytimes.com/1993/08/22/travel/center-of-ottoman-power.html>). *New York Times* 2009年6月4日閲覧。
- ↑ 新建築社『NHK 夢の美術館 世界の名建築100選』新建築社、2008年、32頁。ISBN 978-4-7869-0219-2。
- ↑ Kleiner, Fred S.; Christin J. Mamiya (2008). *Gardner's Art Through the Ages: Volume I, Chapters 1–18* (12th ed.). Mason, OH: Wadsworth. p. 329. ISBN 0-495-46740-5.
- ↑ *^a^b^c^d^e^f* Janin (1953), p. 472.
- ↑ *^a^b^c^d^e^f^g^hⁱ* 日高ら(1990)、p.21-24、2.ドームを仰ぎ見るとき、◎ハギア・ソフィア大聖堂<ユスティニアヌス大帝による建設工事>
- ↑ Alessandro E. FONI, George PAPAGIANNAKIS, Nadia MAGNENAT-THALMANN. “Virtual Hagia Sophia: Restitution, Visualization and Virtual Life Simulation (http://web.archive.org/web/20070709194035/http://www.virtualworldheritage.org/Virtual_Hagia_Sophia.pdf) ([PDF](#))”. 2007年7月9日時点のオリジナル (http://www.virtualworldheritage.org/papers/3181_976-Virtual_Hagia_Sophia.pdf)よりアーカイブ。2007年7月3日閲覧。
- ↑ *^a^b* 日高ら(1990)、p.20-21、2.ドームを仰ぎ見るとき、◎ハギア・ソフィア大聖堂<ニカの乱>
- ↑ *^a^b^c^d^e^f* 日高ら(1990)、p.24-26、2.ドームを仰ぎ見るとき、◎ハギア・ソフィア大聖堂<第一ドームの崩壊>
- ↑ Janin, Raymond (1950) (French). *Constantinople Byzantine* (1 ed.). Paris: Institut Français d'Etudes Byzantines. p. 41.
- ↑ *^a^b^c^d* Müller-Wiener (1977), p. 86.
- ↑ “Hagia Sophia (<http://www.emporis.com/en/wm/bu/?id=hagiasophia-istanbul-turkey>)”. Istanbul /: Emporis. 2011年12月4日閲覧。
- ↑ *^a^b^c* 日高ら(1990)、p.28-29、2.ドームを仰ぎ見るとき、◎ハギア・ソフィア大聖堂<その後の歴史>
- ↑ 井上浩一『ビザンツ皇妃列伝』（白水社）P137-138
- ↑ *¹* (<http://www.ingentaconnect.com/content/routledg/calim/2004/00000016/0>)
- ↑ Brubaker (2011), p. 115
- ↑ Maranci, Christina. "The Architect Trdat: Building Practices and Cross-Cultural Exchange in Byzantium and Armenia (<http://www.jstor.org/stable/3592516?origin=JSTOR-pdf>)." *Journal of the Society of Architectural Historians*, Vol. 62, No. 3, September 2003, pp. 294–305.
- ↑ Müller-Wiener (1977), p. 87.
- ↑ *^a^b* Mamboury (1953) p. 287
- ↑ *^a^b^c^d^e^f^g^hⁱ^j^k^l^mⁿ* Müller-Wiener (1977), p. 91.
- ↑ *²* (<http://www.teslasociety.com/hagiasophia.htm>)
- ↑ Ali, Daniel and Spencer, Robert. *Inside Islam*. West Chester: Ascension Press, 2003, pp. 108–110, 112–118.
- ↑ Runciman, Steven (1965). *The Fall of Constantinople, 1453*. Cambridge: Cambridge University Press. p. 145. ISBN 0-521-39832-0.
- ↑ Nicol, Donald M. *The End of the Byzantine Empire*. London: Edward Arnold Publishers, 1979, p. 88.
- ↑ *^a^b* Nicol. *The End of the Byzantine Empire*, p. 90.
- ↑ *^a^b^c* Runciman. *The Fall of Constantinople*, p. 147.
- ↑ Runciman. *The Fall of Constantinople*, pp. 133–134.
- ↑ Nicol, Donald M. *The Last Centuries of Byzantium 1261–1453*. Cambridge: Cambridge University Press, 1972, p. 389.
- ↑ Runciman. *The Fall of Constantinople*, p. 149.
- ↑ Janin (1953), p. 475.
- ↑ *^a^b* Mamboury (1953), p. 288.
- ↑ Tafur, Pero (1926). *Travels and Adventures, 1435–1439*. Trans. M. Letts. London: G. Routledge. pp. 138–148.
- ↑ G. Gerola, “Le vedute di Costantinopoli di Cristoforo Buondemonti,” SBN 3 (1931): 247–79.
- ↑ Necipoğlu (2005), pg. 13
- ↑ Mungan, I. (2004). *Hagia Sophia and Mimar Sinan* (<http://books.google.be/books?id=6j5nuvAd44QC&pg=PA383&dq=Sinan+earthquake+%22Hagia+Sophia%22#PPA383,M1>). Mungan & Wittek (eds); Taylor & Francis Group, London. pp. 383–384. ISBN 90-5809-642-4.
- ↑ 帝政ロシアにおける長さの単位（Аршин）。1 аршин ≈ 0.7112 m
- ↑ *^a^b^c^d* Müller-Wiener (1977), p. 93.
- ↑ “World Monuments Fund – Hagia Sophia (<http://www.wmf.org/project/hagia-sophia>)”. Wmf.org. 2011年12月4日閲覧。

46.

↑

“Ystanbul Tanıtýmý - Ayasofya Müzesi (http://www.istanbul.gov.tr/Default.aspx?pid=343)”. Istanbul.gov.tr. 2011年12月4日閲覧。

47.

↑

İbadete açık Ayasofya (http://arsiv.sabah.com.tr/2006/07/04/gnd102.html) （トルコ語）

48.

↑

日高ら(1990)、p.29-31、2.ドームを仰ぎ見るとき、◎ハギア・ソフィア大聖堂<ビザンティンの光>
49.

↑

森田慶一著『西洋建築入門』東海大学出版会
50.

↑

^a ^b 日高ら(1990)、p.66-69、2.ドームを仰ぎ見るとき、◎ハギア・ソフィア大聖堂<現代のハギア・ソフィア大聖堂> -建築史研究家たちの挑戦
51.

↑

Index of Ahmet Ertuğ’s exhibitions. (http://www.ahmetertug.com/index-exhibitions-1.html)

参考文献

- シリル・マンゴー『ビザンティン建築』（飯田喜四郎訳、本の友社〈図説世界建築史〉、1999年、ISBN 9784894390201）
- ジョン・ラウデン『初期キリスト教美術・ビザンティン美術』（益田朋幸訳、岩波書店〈岩波世界の美術〉、2000年、ISBN 9784000089234）
- 益田朋幸『ビザンティン』（山川出版社〈世界歴史の旅〉、2004年、ISBN 9784634633100）
- 浅野和生『イスタンブールの大聖堂　モザイク画が語るビザンティン帝国』（中央公論新社〈中公新書〉、2003年、ISBN 9784121016843）
- 日高健一郎・谷水潤『イスタンブール』丸善〈建築巡礼17〉、1990年。ISBN 4-621-03518-5。

関連項目

- 大聖堂の一覧
- 著名なモスクの一覧
- 東ローマ帝国
- オスマン帝国
- ビザンティン建築
- ローマ建築
- イスタンブール歴史地域
- トプカプ宮殿
- スルタンアフメト・モスク
- イスタンブール地下宮殿
- スレイマニエ・モスク
- カーリエ博物館

画像外部リンク

 360° panoramic view (http://maps.yandex.com/-/CVfSRK~H) (virtual tour)

外部リンク

- アヤソフィア博物館 (http://www.ayasofyamuzesi.gov.tr/) （トルコ語、英語）
- ハギア・ソフィア学術調査団 (http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~hsophia/new_page_1.htm) （筑波大学）
- 世界建築ギャラリー　「聖ソフィア大聖堂とキブラ」 (http://www.kamit.jp/17_world/36_istanbul/istanbul.htm)
- アヤソフィア (http://www.constantinopleguide.com/Hagia_sophia_jp.html)

「https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=アヤソフィア&oldid=72513664」から取得

最終更新 2019年4月25日 (木) 14:03 （日時は**個人設定**で未設定ならば**UTC**）。

テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は**利用規約**を参照してください。